身体性の表現と小説の政治学
——横光利一『上海』における外国人表象——

李　征

一　はじめに

横光利一の長編小説『上海』は、世界的に注目を浴びていた一九二〇年代の大都市上海を舞台にした作品である。そこに描かれた都市表象について、筆者は、かつて別稿でその地理的空間と五・三〇運動の表象に対する考察を試みたが、外国人表象の問題に触れるまでには至らなかった。(1) 本稿は、前稿からの考察の一環として、引き続き『上海』という作品を外国人表象の視点から論じるものである。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、上海租界に居留する外国人は、おおよそ二十数カ国に及び、その総数は六万人に達していた。そのうち、欧米系のイギリス人、アメリカ人、フランス人がそれぞれ六千人、二千人、五千人ほど、日本人は二万人前後であって、残りが白系ロシア人やアジア系の印度人、ベトナム人などであった。この国際都市における外国人の居留区域は「租界」と称せられたが、租借された区画という意味である。(2) こうした都市状況からみて、上海は、中国の領土でありながら、「国のなかの国」と言われるほど、当時は英米仏の軍事・警察力によって治外法権化されていた都市空間であった。このような一九二〇年代の租界都市上海を舞台とする小説『上海』には、その視点が日本人の登場人物に設定され、その視点をとおして多くの外国人の姿がとらえられているが、それは租界が多国籍の外国人のもつそれぞれの固有な政治・経済・文化的な様相がそのなかに色濃く植え付けられてきたというモザイク的な都市の構造にもとづくことはいうまでもなかろう。

それゆえに、『上海』という作品における外国人の登場人物の表象について考える場合、その表象が日本人の登場人物

の眼からどのように見られていたのか、またそこにどれほど歪められた外国人表象がみとめられるのかといったことは、ポスト・コロニアリズムの観点からいってもきわめて興味深い課題となろう。「俺の身体は領土なんだ」(「風呂と銀行」九)という参木の言葉からうかがえるように、この小説における視点は、参木や甲谷という日本人の眼をとおして上海という都市が描かれているのだが、その視線は、つねに上海に確固とした権益をもつ西欧列強に割り込むかたちで、中国大陸に新たな権益を獲得しようとする日本の国家的政策によって大きくゆがめられていることは周知の事実であろう。そのため、その眼に映った外国人の表象には一九二〇年代から三〇年代にかけての日本人の世界(国際)認識の一端がみとめられると予想されるのである。

そこで本論に入ろうと思うのだが、その前にあらかじめ断っておきたいのは、本稿でとりあげる「外国人」という用語は、あくまでも『上海』という小説の構造から見た相対的なとらえ方であるということである。つまり、この用語が、上海における日本人以外の居留者、たとえば欧米人や印度人、ロシア人などに限らず、さらに上海における中国人をも含んでいるのだと理解されたい。

二　中国人の資本家銭石山の表象—「傴僂」と「阿片」の意味—

『上海』の節立において、かなりの位置を占める中国人として登場するのは、まず上海に流れて来た日本人のお柳の旦那(パトロン)として設定されている銭石山があげられる。かれが小説に登場する最初には、まだ実名が表記されず、ただ「富豪の支那人」と記されているだけである。お柳は上海の日本人街でトルコ風呂を経営しているのだが、それにはこの銭石山の財力によるところが大きいと思われることからみて、かれは上海の民族資本家だと推定できよう。お柳は銭石山の「妾」でありながらも、また客となってやって来る若い日本人男性との肉体関係を求めてやまない人物である。彼女のこうした性衝動は、のちにも触れるように、「旦那」銭石山の変態的な性欲を満足させるためだとも考えられる。そこで、銭石山のこのような陰微な異常性、当時の日本人の性倫理からすれば、悪の化身といった造型がほのめかされていることにも留意する必要があろう。

小説における銭石山の肖像は、まずシンガポールの日本系材木会社から上海に出張して来た甲谷の眼によってとらえら

れる。

甲谷は豪商のお柳の主人の銭石山に材木を売りつける方法を考へながら、女中の指差した奥を見た。／「月明の良夜、寝勉に接す。」／ふと房前の柱にかかつた対子を読むと、甲谷はお柳の背中の蜘蛛の色を思ひ出した。お柳は正面の八仙卓の彫刻の上で、西瓜の種を割りながら、傴僂の男と笑つてゐた。側壁に沿つて並んだ紫檀の十景椅子の上では、重さうな大輪の牡丹の花が、匂ひを失つたまま崩れてゐた。（「持病と弾丸」四）

この甲谷の眼に映る室内描写と民族資本家銭石山のイメージからは小森陽一の言う「喩の多次元性」[3]でも感じられる。お柳に抱きかかえられてベッドに横たわる怠惰で萎えた銭石山が病弱な「傴僂」でありながら、阿片に侵された中毒患者でもあるように描かれている。それに加えて、室内の調度や「お柳の背中の蜘蛛の色」は、かれが頽廃のムードを漂わせた人物であることを表象する。このような姿態と室内の描写は、銭石山という人物があたかも上海の暗部に活動する秘密結社のボスではないかと読みとらせる効果をもつにちがいない。

銭石山は甲谷に向かって、「わたしは此の通りお国の方が何より好きなもんですから、此の年になつても損ばかりしてをります」と言う。「此の年」という時点はまさに一九二五年、上海では折から五・三〇運動が起こっている最中である。この五・三〇運動を契機として、銭石山はお柳との関係をとおして「此の通りお国の方が何より好きなもんですから」という言葉とは裏腹に、日本が上海を拠点として中国大陸に進出しようとる政策に加担する「豪商」から一転して、日本を含めた西欧列強を上海から排除しようとする民族資本家の闘士へと変身していく。その背景を小説では次のように叙述する。

支那人紡績は、前から久しく邦人会社に圧迫せられてゐたのである。彼らは邦人紡績に罷業が勃発すると同時に、休業してゐた会社さへ、全力を上げて機械の運転を開始し始めた。罷業職工内の熟練工が、続々と彼らの工場へ奪られ出した。国貨の提唱が始つた。日貨の排斥が行はれた。さうして、支那人紡績会の集団は、今こそ支那に、初めて資本主義の勃発を企画しなければならぬ機会に遭遇したのだ。（「持病と弾丸」八）

上海が租界として開港して以来、外国資本が続々と入り込むようになって、上海港における輸出入貿易と金融・産業はほとんど外国資本に独占されてしまっていた。ただ一九二〇年代に入って、中国の民族資本も相当な規模に成長し、有名な中国人の資本家、たとえば虞洽卿なども上海の政治経済の舞台で活躍するようになっていた。前掲の小説叙述は、このような中国資本家の政治・経済的な台頭に着目したものだと考えられる。かれらの活躍は、

> 此の支那資本家の一団である総商会の一員に、お柳の主人の銭石山が混つてゐた。彼は日本人紡績会社に罷業が起ると、彼らの一団と共に策動し始めた。彼らは支那人紡に資金を増した。排日宣伝業者に費用を与へた。同時に罷業策源部たる総工会に秋波を用ふることさへ拒まなかつた。さうして、此の支那未曽有の大罷業が、どこからともなく押し寄せた風土病のやうに、その奇怪な翼を刻々に拡げ出したのだ。
> （「持病と弾丸」八）

と叙述されている。この叙述からは、高重などの日本系の紡績工場が絶えず中国職工の罷業への対策に追われているのとは反対に、むしろ、それを扇動するようにして、銭石山らの「支那資本家」が、着々と政治・経済的に「勝利」を収めているといったことが読みとれる。しかし、小説において銭石山らの「勝利」がいくら並べられても、その描写から読者が読みとる中国人の姿は、この中国資本家の矮小・醜悪な姿に覆われてしまう。このような読みの錯覚はどこから来たのか。それはいうまでもなく、銭石山の「肉体」へのまなざしがつねに中国人に対して優越した意識をもつ人物として設定されている甲谷の眼に求めるべきであろう。

前の甲谷と銭石山の初対面の場面に戻ってみよう。銭石山は、「ああ、さうさう、　今日はまた日本紡が四つほど罷業で沈没しました。いよいよこれは」と、上海での日本の権益の喪失を冷笑するがごとく甲谷に突きつけてくる（「持病と弾丸」四）。このような言葉に対して、甲谷はどう受け止めようとしているのであろうか。日本人の優越性の背景であった日本企業の権益の喪失という事態に直面して甲谷は、肉体と精神の屈折感を感じたとみられる。この場面の直前、甲谷がお柳の招きでトルコ風呂に入り、お柳と一緒に入浴しているとき、銭石山は二階の部屋から入浴中の二人の肉体と性行為を見て楽しんでいた。そのことはお柳の口から、あなたと一緒に入浴するのが、銭石山の「好奇心」を満足させるためで、旦那に黙許されたのだと告げられる。欧米人に比べて卑小な肉体にコンプレックスを抱く甲谷はそのとき、この銭石山の

「醜悪」な心理に対して、ある種の屈折を感じた。[4] 肉体の屈折とはこのことだと考えられる。その反発が逆にこの中国人の肉体の醜悪と頽廃を見つめさせたのであった。

それでは、精神の屈折とはどのようなものであろうか。それは明らかに「日本紡が四つほど罷業で沈没しました」といった銭石山の冷笑によって起ったといってよかろう。この冷笑のあと、甲谷の眼に映る銭石山は次のように様相が変わっていく。

> （銭石山は）八仙卓の角を持ったまま、急にぶるぶると慄へ出した。／お柳は主人の後から立ち上げると、傴僂を抱いて寝台の上へ連れていつた。／「一寸暫く、御免なされ。時間がやつて来ました。」／主人は甲谷に会釈をしながら横になると、お柳の与へた煙管を銜へて眼を細めた。彼の唇が魚のやうに動き出すと、阿片がじーじー鳴り始めた。（中略）二人は間もなく、恍惚とした虫のやうに、眼を細めた。お柳の豊かな髪が、青貝をちりばめた螺鈿の阿片盆へ、崩れ出した。傴僂の鼻が、並んだ琥珀や漢玉の隙間で拡がつた。―「月明の良夜、慇懃に接す。」甲谷の頭の中で、対子の詩文が生き生きとして来ると、やがて、、、、、な男女の礼節に変化し始めた。甲谷は今は、お柳との無銭の逸楽に耽つた代価を、完全に支払はされてゐる自身に気附かねばならなかつた。（「持病と弾丸」四）

銭石山の容姿は、阿片・傴僂・妾といった表象がその身体性の喩となることで、それらはかれの「醜悪」な異常性に還元されて、揶揄・嘲笑の対象となっていることがうかがえる。このことは甲谷の精神の屈折の反発がやはり相手の中国人の身体（肉体）に投影されたものとみてよかろう。

この甲谷のまなざしに歪められた銭石山の醜悪な描写は、参木の眼に映る上海の風景、露地の料理屋の主人が阿片を吸う場面にもつながっている。

> 臓物のぐつぐつ煮えた鍋の奥では、痼まで剝つた支那人の坊主頭が、瀬戸物のやうな鈍い光を放つてゐた。主婦の眼にあてたガーゼから流れる水音が、酒と一緒に参木の脊骨を慄はせた。彼の前では、煉瓦の柱にもたれた支那人が眼を瞑つたまま煙管を啜つてゐた。煙管の針の先きで、飴のやうな阿片の丸が慄へながら、ぢいぢいと音を立てた。豚の足は所々に乱毛をつけたまま、割れた踵を鍋の中から出してゐた。（「掃溜の疑問」一）

この叙述にも「喩の多次元性」という表現手法が遺憾なく発揮されている。このような露悪と頽廃、そして無気力がはびこる上海の貧民窟（露地）の風景が、中国人、あるいは銭石山の造型の喩となって交錯する。租界都市上海に、当時はたして銭石山のような民族系の産業・金融資本家が活動していたかどうかは別の問題として、少なくとも小説『上海』には、銭石山という人物はそうでなければならないという外国人表象の政治学が強烈にはたらいていることがみてとれよう。

小説の初出テキストにおいては、前述したように、日本の権益の喪失を冷笑するがごとく突きつけてくる銭石山の発言と、それに対する甲谷の反応が自分とお柳の入浴場面を楽しむ銭石山の異常性へとつながるだけであった。しかし、決定版になると、銭石山の勢いに圧倒されて、その肉体を矮小化してとらえることしかできなかった初出のテキストの甲谷は、それまでの無力な姿勢を一変し、堂々と国際関係における日本と中国の状況に対して熱弁をふるい、その結果、銭石山は返す言葉に詰まってしまった、というように改稿されている。そのきっかけは次のように叙述されている

> 銭石山の視線が、日本の急所を見透したかのやうに尊大になつて笑ひ始めると、甲谷は急に、今まで彼に売りつけようとしてゐた材木の話のことよりも、支那人の弱味について考へ出した。（初版二八節）

ここにみられる「支那人の弱味」という言葉は、決定版のテキストではアジア主義者として登場する山口という人物のアジア思想にもつながるように構想化されている。

> 近頃、排英運動が、中国人の間に盛んになつて来たのは、これは排英運動ではなくつて、実は排支運動をしてゐるのと同様だつたといふことについては、中国人の誰もが気がつかなかつたことなんですが、（中略）世の中の識者は、世界はたしかに中国人を中心にして廻転してゐるといふことぐらゐは知つてゐますよ。しかし、それだからこそ、また世界は共同に中国人を敵に廻して争つていかなければならぬのだと思ひますね。何しろ、中国人は世界で一番人数が多いのですから。（初版第二八節）

このアジア思想からは、もはや日本人甲谷の肉体と精神の屈折といった要因はすっかり消え去っている。ここにみえる

構想は、アジアにおける日本（人）の優越性を前提として「中国人」を指導し、欧米列強と対抗しようとする図式である。この決定版ではまさに中国人は日本人によって指導されるべき民族であった。したがってそこから逸脱する中国人は悪の存在であった。この構想には、のちに触れるところの〈中心〉と〈周縁〉（〈外部〉）といった二元論的な思考形式がみてとれることに注意すべきだろう。つまり、〈中心〉から放射される〈周縁〉に位置されるものが善で、その〈外部〉に逸脱するものはすべて悪という思考がそれである。このような思考は決定版に加上されることで、初出の雑誌掲載のテキストの銭石山の表象に見られる露悪的な中国人表象が、改稿された初刊本および決定版『上海』になるとさらに強化されているとみねばなるまい。すなわち、初刊本および決定版のテキストでは、銭石山の醜悪な容姿はまだ雑誌掲載テキストの叙述のままだが、日本のアジア主義思想の浸透によって民族資本家としての銭石山の造型は、肉体と精神のみならず、政治的にも弱められてしまっている。

三　中国人の職工共産党員芳秋蘭の表象――「職工」から「貴婦人」へ――

前述した銭石山の表象に見られた「醜悪」なる中国人という造型は、作品における主要な登場人物としてのもう一人の中国人女性、芳秋蘭の造型にもかかわっている。この芳秋蘭という女性は、中国職工の罷業のリーダとして資本家の銭石山と対蹠的なかたちで描かれているのだが、この対立的ともいってよい人物設定がそのまま銭石山と彼女との造型性にも対称性をみせている。以下に見るように、芳秋蘭には「醜悪」なる中国人表象がみとめられないのだが、その造型はあくまでも彼女が参木との恋愛関係という小説の筋立にかかわるからだ、とみなしてよかろう。

芳秋蘭が初めて登場する場面は、上海にある日本系の紡績工場に設定されており、そこでの彼女の姿は、同工場の職工係高重と参木の眼といった二重の視線からとらえられている。

> 棉を冠つて群れ動く工女の肩が、魚のやうにベルトの瀑布の中で交錯した。揺れる耳環が、機械の隙間を貫いて光つて来た。／「君、あそこの隅にスラツビングがあるだらう。その横で、ほら、こちらを向いた。」と高重は云ふと黙り出した。／絡つたパイプの蔓の間から、凄艶な工女がひとり、参木の方を睨んでゐた。参木は彼女の眼から、狙はれたピストルの鋭さを感じると、高重に耳打ちした。／「あの女は、

何者です。」／「あれは、君、共産党の芳秋蘭さ。あの女が右手を上げれば、此の工場の機械はいつぺんに停るんだ。」（中略）参木は暫く芳秋蘭の美しさと闘ひながら、彼女の動作を見詰めてゐた。（「掃溜の疑問」二）

この芳秋蘭に関する描写には、まず高重の政治的な背景をもつ視線がみとめられる。「あの女が右手を上げれば、此の工場の機械はいつぺんに停るんだ」という高重の言葉は、やがて起るストライキおよび五・三〇事件の伏線となって、彼女が職工のリーダーとして強力な指導力を発揮することになるのを示唆するであろう。このような政治的な視線と交錯しているのは、参木による芳秋蘭の肉体への観賞的なまなざしである。すなわち、その眼に映った彼女の姿は、主に二つの細部描写に集中している。その一つは機械の隙間から光を放つ芳秋蘭の「耳環」であり、いま一つは彼女の「凄艶」な美貌そのものである。この高重と参木のまなざしの交錯は、これ以後の展開においても芳秋蘭の登場する場面ごとに繰り返し現れることになる。

この参木の眼に映る芳秋蘭の美貌は、小説の構成からみて、銭石山の〈傴僂〉という「醜悪」なる身体描写と対照的にとらえていることは明らかである。芳秋蘭における外国人表象を一言でいえば、それはエキゾチズムである。ポスト・コロニアリズムの観点からすれば、銭石山の「醜悪」と彼女のエキゾチズムはともに日本という〈内部〉からは得体の知れない〈外部〉の存在の様相として次元を等しくする表象である点では深くかかわっているといえよう。つまり、赤坂憲雄の概念を借りれば、「異人」ということである(5)。そのエキゾチズムの美はいうまでもなく、第一に参木の「恋人」という設定から求められたものであって、その造型にはロマンチックな大衆小説としても読ませたいという横光利一のねらいがあったとみとめるべきであろう。

こうみれば、初版本『上海』の冒頭のところで新たにつけ加えられた「白晰明敏な、中古の勇士のやうな顔」(6)といった参木の肖像描写が決して、単純な顔つきの描写にとどまらないのであろう。異国の美男美女といった構図―「（日本の？）中古の勇士」と「（中国の）貴婦人」―はこれからの小説の展開とどうかかわっているのか。その描写は、前掲の引用以外にも見られる。そのうち、もっとも注目すべきなのは雑誌掲載のテキスト「掃溜の疑問」における描写である。筋立を追えば、やがて勃発したストライキによって、高重の紡績工場は大混乱に陥った。芳秋蘭の美貌に強くひかれた参木は、騒いでいる職工たちの群れの中にまきこまれた彼女を見つけて救い出したが、みずからも負傷した参木は、芳秋蘭にみちび

かれて上海古城の支那街（上海の中国人居住地区）にある芳秋蘭の部屋に泊まる。参木のまなざしにとらえられた芳秋蘭の美貌は、彼女の室内や「上海古城」の描写と、すでに指摘した「喩の多元性」がはたらきかけることで相応し合い、職工のリーダーから貴婦人へと変貌していくことには、ある唐突な印象がつきまとう。

別稿ですでに言及したが、この「上海古城」の景観にふさわしいように、芳秋蘭は共産党員であるにもかかわらず、中国伝統の、というよりも上層階級の貴婦人らしく描写される。たとえば、彼女の部屋の壁には「緞帳」が掛かり、「紫檀の椅子」が置かれているし、そんな部屋に住む芳秋蘭は、繊細さに満ちあふれ、「古風な水色の皮襖（オーバー）」に身を包み、耳には「耳環」（イヤリング）をつけていた。このような美人風俗画から抜け出てきたような芳秋蘭の人物造型はエキゾチズムそのものといってよかろうが、その例として、芳秋蘭の服飾の一つとして描写されている「耳環」をめぐって考察してみることにする。

この参木の眼に焼き付いた「耳環」が、芳秋蘭に限らず、上海の多くの紡績女工の耳につけられていたことは、上海旅行をした際の横光の見聞であったかどうかはわからない。しかし、興味深いのは、この話が横光と同時代の日本人労働問題研究者宇高寧の『支那労働問題』のなかにも、上海紡績工場の中国女工の間に見られた流行現象として記されているということである。その箇所を引用してみたい。(7)

> 日本人紡績（工場）に於ける支那女工は近来（最近）生活の程度が著しく向上して婦女工の耳輪や腕輪が銀（製品）より金（製品）に変り汚損甚しかつた木綿服が絹服に変つてゐることを一見しても其収得が如何に必要（平均的生活）以上に達してゐるものであるかを知ることが出来る。

その当時、五・三〇事件を含む中国の労働運動を紹介する数多くの著書のなかで最も精細な本書を、横光利一が小説『上海』を執筆するときに参照したかどうかは、確実な資料がないために断定できない。しかし、女工の耳環の逸話はきわめて印象深い記述である。このような流行は当時の日本人女性にはほとんど縁遠いものであった。だからこそ、本書の著者の注目を惹いたとみてよかろう。芳秋蘭の「耳環」も、横光利一にとってエキゾチズムをかき立てる装飾品であった。小説における芳秋蘭の存在とその役割は主要な題材である五・三〇事件との連関にあることは認められながらも、小説の力

点そのものは、日本人参木との恋愛めいた交渉にうかがえる中国人女性の「凄艶」な美貌に置かれていることも否定できなかろう。この芳秋蘭という登場人物のエキゾチックな表象をとおして、当時の風俗小説的ロマネスク、あるいは租界都市上海へのエキゾシズムへの傾斜は、小説『上海』のまた一つのねらいだったと考えられる。

初出のテキストでは、芳秋蘭が職工のリーダーで共産党の党員でありながら、「耳環」を付け「上海古城」を散策するエキゾチックな貴婦人のように描かれていたことはみてきたとおりである。ただその異なる造型性が彼女の政治的役割とロマネスク小説のヒロインという様に、はっきり分かれているために分裂した印象を与えることは否めない。このような造型が決定版では、さらに海外の情報を求める諜報員の役割が付け加えられ、バンド地区の「ダンスホール」にも出入りする役割をもたされるようになる。決定版の第四節で、バンド地区にある宮子のダンスホールで嫁探しのために上海に来ていた甲谷と出会った山口は、芳秋蘭の姿を見かけ、甲谷にそれとなく告げる。そこで、甲谷は宮子と踊りながら芳秋蘭に近づく。間近で芳秋蘭の顔を見た甲谷は彼女の美貌に惹かれ、宮子の腕を引っぱって芳秋蘭の後を追いかける。すると、芳秋蘭も、「舞いながら、男の肩の彼方から甲谷の方を覗いて」甲谷に好意を持ったかのように振り向くのだが、その顔に媚態を含んでいたことは、甲谷がふと「歌余舞ひ倦みし時、嫣然巧笑。去るに臨んで秋波一転」という徐校濤の美人譜の一節を口ずさんだことでわかる。「あの婦人は実に綺麗だ。珍しい」と感心した甲谷は、山口に芳秋蘭を紹介してくれと頼むが、山口は「だつて、君を紹介するのは、日本の恥をさらすようなもんぢやないか」といい、さらに「それが、僕のはお柳の主人の銭石山に紹介されたんだからね」と、それとなく以後の芳秋蘭と銭石山の関係を暗示する。

このように、決定版の芳秋蘭には、新たな役割が付け加わったことで、その美貌を政治的な側面にもかかわせるようになり、彼女の造型性にそれなりの同一性がみとめられるようになる。それとともに、初出のテキストでは、芳秋蘭との恋愛にかかわっているのは参木だけであったが、決定版になると、彼女と参木との恋愛のストーリーに甲谷も介入するようになって、彼女をめぐる三角関係のストーリーが小説構造のなかに一層組み込まれることになるのである。たとえば、「あの女は、あれは素敵だ。あれが俺の嫁になれば、もう世の中は締めたものだ」と甲谷が思う叙述がみえている。

このような役割の加上と恋愛ストーリーの複雑化にしたがって芳秋蘭の美貌は一層強調されてくる。

芳秋蘭の黄色な帽子の宝石が、街灯にきらめきながら車（黄包車）の上に揺れていつた。（中略）ブリッヂ形の秋蘭の鼻は、ときどき左右の店頭に向きながら、街路樹の葉陰の間を貫いて辷つた。唾を吐いてゐる乞食や、舗道の上で銅貨を叩いてゐる車夫や、口の周囲を光らせながら料亭から出て来たお客や、煙管を銜へて人の顔を見てゐる売卜者やらが、通りすぎる秋蘭の顔を振り返つて眺めていた。／甲谷は彼らがそんなに振り返り始めると、ふと忘れかけてゐた秋蘭の美しさを、再び思い浮かべて彼らのやうに新鮮になつた。ひき緊つた口もと。大きな黒い眼。鯰水式の前髪。胡蝶形の首飾。淡灰色の上衣とスカート。（初版第四節）

この、芳秋蘭の容姿に魅了された甲谷がその後を追ってゆく場面でも、前田愛氏が指摘するように、芳秋蘭が淫婦の媚態を帯びていることは読みとれる。[8] このような、芳秋蘭の造型にみられる貴婦人らしさの増大は、作品内部における彼女の役割が複雑になったことに照応しているとみてよかろう。前掲の徐校濤の美人譜の一節を甲谷の口を借りて詠わせるのも、「上海古城」の表象と結びつけて彼女の美貌をよりエキゾチックに強調しようとしたものであろう。

四　白系ロシア人オルガの表象――「物体化」された肉体――

昭和七年（一九三二）九月、すなわち初刊本『上海』が出版された二ヶ月後、横光利一が「歴史」といったタイトルで、小説でもなく、随筆でもない作品を残した。そのなかに日露戦争前後ロシア滞在の日本人が語ったロシア見聞という新聞記事がメモされており、『上海』を執筆する前後の横光利一が白系ロシア人に対して強い関心を示していたことがうかがえる。

『上海』において、オルガをはじめとする白系ロシア人の造型は、外国人表象としてとくに注目に値する。白系ロシア人が上海に流入してきた経緯に関して、小説ではオルガの口をとおして述べられている。それによれば、一九一七年、ロシアに赤色革命が起り、これによって帝政ロシアの貴族達は、ソビエトの弾圧から逃れるために外国へと亡命せざるをえなかった。『上海』におけるオルガたちのような白系ロシア人は、シベリアを経由して中国東北部のハルビンにたどり着き、そこからさらに南下して東アジア最大の国際都市上海へと生活の資を求めて流入した。

父親がハルビンで亡くなったあと、上海にたどりついたオルガは、他の白系ロシア人と同じ様に、すぐに生存の危機に

さらされた。亡命してきた多くの白系ロシア人の男性たちは乞食とならざるをえなかったが、女性はより悲惨な境遇に陥った。売春婦がそれである。小説『上海』の冒頭に登場したロシア人の売春婦もまさにこのような境遇を経てきたロシア人女性として描かれている。

一九二〇年代に出版された『貢太郎見聞録』には、上海における白系ロシア人に関する記述がみられる。それによれば、「本国の動乱のために家産を失ひ、上海へ流れて来た欧露の婦人の中にも私娼に墜ちている者があつた。それは音楽や語学の看板をかけて客を誘ふ者もあれば公園や街頭で客を誘ふ者もある。黄浦灘にある共同公園のプラタナスの下のベンチに腰をかけて、黄浦江から吹きあげる風に浸っていると、紅い帽子を着たのや、厚化粧をしたのが傍をちらちらする」[9]と述べられている。小説『上海』における白系ロシア人の描写は、おそらくこのような記述を参照して再構成されたものと考えられよう。本節の冒頭で紹介した白系ロシア人オルガもそのなかの一人であった。彼女はアジア主義者山口の情婦となっていたが、参木や甲谷にも身を任せる女性であった。そんなオルガを参木がどう見ていたのか、そのことを迂遠なようだが、ひとまずオルガの場面を離れて、上海における帝政ロシアと赤色ロシアの間の闘争、および日本人の登場人物の眼からそれがどうとらえられているかを考察してゆくことからはじめる。

ハルビンで赤色ロシアの勢力に追われていた帝政ロシアの貴族たちが上海に流入したことはすでに触れたが、かれら旧貴族たちが上海租界でソビエトに対する秘密活動をおこなっている姿が、甲谷の眼にとらえられている。アジトはバンド地区にあるパーテルという当時の上海における最高級のホテルであった。

> 重い時計の振り子の下で、帝政ロシアの幹部派達がいつもの憂鬱な顔を並べて密談に耽つてゐた。巻かれたナフキンの静かな群れ。暖炉の沈んだ大理石。厚いテーブルの彫刻に散らかつた干菓子の粉。秘密な波を垂れ下げたカーテンの暗緑色。—ふと甲谷は此の重厚なロシアの帝政派の巣窟、パーテルは、今は自分の快活さに不似合なことに気がついた。眼につく一切のものが過ぎたロココの優雅さのやうに低声で、放埒に巻き上つた絨毯の端にまで不幸な気品がこぼれてゐる。(「足と正義」七)

この小説の場面に出てくる帝政ロシアの亡命貴族たちが密謀した計画は、小説において、上海に亡命した白系ロシア人が赤色ロシアの領事館を標的として攻撃する発砲事件として描かれている。

すると突然、その橋の上で、一発の銃が鳴つた。と、更に続いて連続した。橋の向ふの赤色ロシアの領事館の窓ガラスが、輝きながら穴を開けた。と、見る間に、白衛兵の一隊が、橋の上から浮き上つたやうに抜刀した。彼らは喊声を上げつゝ領事館めがけて殺到した。窓から逆さまに人が落ちた。と、枳殻の垣の中へ突き刺つてぶらぶらすると、河の中へ転がつた。／館内では暫く銃声が続いてゐた。が、間もなく、赤色の国旗が降ろされて白旗が高く昇り出した。見てゐる群衆の中から、欧米人の白い拍手が、波のやうに上つた。と、続いて対岸から、建物の窓から、船の中から起りだした。自棄糞になつた甲谷は彼らに和して手を打つた。「万歳、万歳、万歳。」と叫びながら。やがて、抜刀の一隊は自動車に飛び乗ると、群衆の中を逃げていつた。しかし、此の出来事を見てゐた支那の群衆だけは騒がなかつた。いつものことが、いつも起つたやうに起っただけだと云ふやうに。甲谷が穴の開いた領事館の前まで行つたときには、印度人の巡査に担がれた負傷者の傍を、ロシアの春婦達がイギリスの水兵と一緒に、煙草を吹かして通つていつた。（「風呂と銀行」七）

ポットの『上海史』によれば、上海における旧ロシアの領事館は一九二四年七月二十四日ソ連によって接収されたという[10]。『上海』にみる「赤色ロシアの領事館」というのがそれである。ソビエトは同領事館を接収すると同時に、ただちにそれを上海におけるソ連の宣伝活動の拠点にした。

この上海における「赤色ロシア領事館」をめぐって白色ロシアと赤色ロシアとの間に起った政治闘争ということ自体が一九二〇年代の上海租界の一つの政治景観としてみられるのだが、それと同時に、その事件を見る甲谷の傍観者的な視線にも注意すべきであろう。というのは、次のような日本人の視線の背景となる政治的事情があるからである。租界都市上海は、国際政治の眼の集まる東アジア外交の代表的な「舞台」であったために、白系ロシア人の亡命者たちによるソビエトへの憎悪に発する反共闘争は、国際外交に訴えることを目的として演じられた政治的主張のためのショーでもあった。したがって、白系ロシア人亡命者の秘密活動とテロリズムは、当時の日本人のうちにわだかまる反共的姿勢を代弁するものであって、だからこそ小説は甲谷の傍観者的な眼をとおして見物させたのである。このことからも白系ロシア人の憎悪を通して日本人読者の共感を惹くという作家の計算がいかにはたらいていたかを伺わせる。

赤色ロシアの労働者階級の内部に浸透していった影響力は、上海における日本系の紡績工場にも拡大していった。いわゆる「ロシアの魔手」として語られているのがそれである。日本人の視線からとらえられる白系ロシア人は、政治的な側面と、それに民族（人種）的な側面において、それぞれまったく異なる表象をとって現れている。「ロシアの魔手」とい

うのはその政治的側面からとらえるロシア人である。以下ではそれを別稿でとりあげた五・三〇運動の描写をとおしてみてみよう。

> 彼ら集団（支那人紡績会）は自国の国産を奨励する手段として、彼らの資本の発展が、外資と平行し得るまで、ロシアをその胸中に養はねばならぬ運命に立ちいたつた。何ぜなら、中国資本は最早やロシアを食用となさざる限り、彼らを圧迫する外国資本の専制から脱出することは、不可能なことにちがひないのだ。中国では、かうして共産主義の背後から、此の時を機会とした資本主義が駈け昇らなければならなかつた。（「持病と弾丸」八）

五・三〇運動が激化すると、このようなデマゴーグは、さらに赤色ロシアが本国から売春婦を上海に送り出しているといった流言と結びつけられて、より奇怪な情報として伝えられるようになる。「僕は先日、中国新聞のある記者から聞いたのですが、ここの×国陸戦隊を弱めるために、最近ロシアからは数百人の最も有毒な婦人が輸送されたと云ふことですよ。此の話の真偽はともかくとしましても、僕は老獪さの裏を流れる此の老獪さには敬意を表すべきだと思つてゐます」（「持病と弾丸」九）と参木が口にするのがそれである。こうしたデマゴーグは、ソビエトの出現に警戒感を抱いていた英米共同租界の当局の潜在的な恐怖感を、憎悪というかたちで語らせるようになる。「市街は全く総動員の状態に変化し始めた。警官はピストルのサックを脱して騒ぐ群衆の中へ潜入した。すると、核をくり抜くやうに中からロシアの共産党員が引き出された」（「海港章」一）。この情景で注意されるのは、参木の視線が五・三〇事件の進行過程そのものではなく、むしろそれを「警官」（工部局所属）と「ロシアの共産党員」との闘争の図式にあてはめて見ようとしていることである。赤色ロシアの恐怖は日本人をも覆っていたことがみてとれよう。上海に流入してきた白系ロシア人はつねにこの赤色ロシアの存在という政治的側面と結びつけられて表象されている。

したがって、参木や高重の眼に映る白系ロシア人は、ときどき何か偶発的な事件や流言と故意に関係づけられて語られている。参木の言い分によれば、上海に居留する外国人は、「本国から生活を奪われ」ているからこそ、かえって「本国の吸盤となって生活」する「愛国心」の持ち主でなければならなかった。このような国家主義（民族主義）に立つ参木の眼からすれば、国家を喪失した亡命ロシア人は、みずからのアイデンティティを失った「奇怪な人物の群れ」の典型的な

存在として、租界都市上海に流入する亡命者を代表していた。それゆえ、参木の国家主義的価値観からすれば、それこそロシア人は「各国人の最下層の乞食」として軽蔑される存在でもあったのである。ポスト・コロニアリズムの理論からすれば、この参木に代表される日本人のロシア人表象は理論の典型であった。参木の抱く国家主義はまさに国家を〈中心〉〈内部〉とする観念を鮮明にしている。その観念からすれば、国家を喪失した人間は〈周縁〉あるいは〈外部〉の存在として劣等視される。ロシア人の存在形態は野蛮人あるいは原始人と等価の存在にすぎなかったともいえよう。

このロシア人表象をたんにポスト・コロニアリズムとして論ずるばかりでなく、歴史主義的視座からも考察しておこう。たとえば、「あのロシア人達に、われわれは同情する必要は少しもない」という参木の言葉がそのきっかけとなろう。この話をする時点の一九二五年（作品内部の時間）より数年前の、日本がロシアから満州での権益を受け継ぐといった外交交渉の成功は、おそらく上掲したかれの思索を説明する背景として考えてもよかろう。しかし、参木が考えた問題はそれだけで終わらない。

> どこの国でも同じやうに、此の支那の植民地へ集つてゐる者は、本国へ帰れば全く生活の方法がなくなつて了つてゐた。それ故ここでは、本国から生活を奪はれた各国人の集団が集合しつつ、世界で類例のない独立国を造つてゐた。だが、それぞれの人種は、各自の本国が支那の富源を吸ひ合ふための、吸盤となつて生活してゐる。此のためここでは、一人の肉体は、いかに無為無職のものと雖も、ただ漫然とゐることでさへ、その肉体が空間を占めてゐる以上、ロシア人を除いては愛国心の現れとなつて活動してゐるのと同様であつた。（「風呂と銀行」九）

参木にとって、個人の存在の根拠は国家であった。ただその場合、「国」というのが、地域の限定にもとづく政治的単位か、民族の同一性にもとづく政治的単位かは曖昧ではあるが、それはひとまず置くことにする。前に述べた赤色のロシアの恐怖は、ゼネストの扇動者（「露西亜の魔手」）がかれらだというデマゴーグによって倍化されているが、参木のこの白系ロシア人への蔑視をまじえた拒否の姿勢の背景もそこに求められる。しかし、その根底には白色人種への人種的劣等感の屈折した心理がはたらいているとみてよかろう。

つまり、世界史的事実として世界を制覇する白色人種という神話が、日本人にとっては、上海に流入してきた白系ロシ

ア人への優越感という倒錯的思考を求めさせたとみられる。黄色人種ながら、世界の覇権獲得のために西欧列強に伍する日本人の白色人種への劣等意識は、白系ロシア人へのまなざしで倒錯する。山口が仲間の日本人に向かっていかにも自慢気に、「一人の死人で、生きているロシア人の女を七人持てる、七人。それもロシアの貴族だぞ」と豪語するところに、倒錯した優越感の爆発がみてとれる。人骨売買によって莫大な金を儲けたアジア主義者山口の成功のあかしは、白色人種への残忍な報復をないまぜにした倒錯的優越性をみせびらかすことであった。小説『上海』における日本対西欧の構図は、黄色人種として蔑視されてきた日本人の民族認識の倒錯が、ロシア人蔑視をとおして西欧への反発として現れている。その背景にあったものが、白色人種優越論を倒錯した日本人優越感であった

ただロシア人の男性はそれでも、赤色ロシアの国家と対抗するポーズを日本人の眼に見せることで、かろうじて日本人の共感をとどめていた。しかし、それに対して、ロシア人の女性の存在形態は悲惨そのものであった。そのことは「露地」のストリップ劇場で踊る白系ロシア人の女性の描写にみられる参木の視線からうかがえる。この描写は、甲谷と別れた参木がふと湧き出した性欲を紛らすために入った劇場の光景である。

> ロシア人の裸身踊りの見世物が暗い暗い建物の隙間で揺れてゐた。彼（参木）は死人の血色の記憶から逃れるために、切符を買ふと部屋の隅に跼つた。彼の眼前で落ち込んだ旧ロシアの貴族の裸形の団塊が、豪華な幕のやうに伸縮した。三方に嵌つた鏡面の彼方では、無数の皮膚の工場が、茫々として展けてゐた。踊子の口に、銜へたゲラニヤの花が、皮膚の中から咲き出しながら、廻る襞の間を真紅になつて流れていつた。（「持病と弾丸」三）

この薄暗い街底の一隅で、白系ロシア人の女性の裸身踊りは参木の眼から「最早や色情を感じない」。それよりもむしろ、租界といった都市に溜まった掃溜の「没落の新しい展開」として見ていたのであった。

> 彼ら（白系ロシア人）は、やがて後から陸続として墜落して来るであろう人間の、新鮮な生活の訓練のために、意気揚々として笑つてゐた。皮膚の建築、ニヒリズムの舞踏、われらの先達―参木は思はず乾杯しようとしてグラスを持つた。と、皮膚の工場は急激に屈伸すると、突然、アーチのトンネルに変化した。油を塗つた丸坊主の支那人が、舌を出しながら、そのトンネルの中を駱駝のやうに這い始めた。油のた

めに輝いた青い頭の皮膚の上に、無花果の満ちた花園が傾きながら映つていつた。世界は今や何事も、下から上を仰がねばフィルムの美観が失はれ出したのだ。—再び、トンネルが崩れ出すと、参木は後を振り返つた。と、塊つた観客の一群の顔の上に、べつたり吸ひついた吸盤のやうな動物を、彼は見た。彼は、その巨大な動物を浮き上らせた衣服の波の中から、逆に野蛮な文明の建築を感じ出した。」(「持病と弾丸」三)

ここで白系ロシアの女性の裸身(肉体)は、「無数の皮膚の工場」、「皮膚の建築」、「野蛮な文明の建築」というメタファーとしてとらえられている。参木のまなざしからすれば、それは無機質な物体にすぎないのである。「工場」が商品を生産してゆくがごとく、そして「建築」が都市の景観でもあるがごとく、彼女たちは物化され、性の欲望を満たす対象ないし景観としての商品に堕落する。性という商品による踊りは、まさに「ニヒリズムの舞踏」でしかない。頽廃と爛熟、そしてそれらが倒錯した奇妙な光輝。外国人表象としてのロシア人の姿は、血のかよう人間から堕落した物体でしかなかった。この肉体の物体化表象こそ、日本人の〈内部〉と〈外部〉といった二元論的な価値観と結びつけてとらえる外国人表象の極限であったといってよかろう。彼女たちはもはや人間存在としてみとめられない物体視・商品視される交換価値しか付与されることはなかった。

祖国を喪失して上海に流入してきた白系ロシア人は、「上海に落ち込んだが最後、性格を失った奇怪な人物の群れ」を象徴していた。その極限に近い表象が物化された表現であった。参木の視線をとおしての日本人の価値観からすれば、上海に巣くう人間たちは、国家(民族)というみずからのアイデンティティを失ったとき、すべては物化され、交換可能な商品となり、租界という都市の景観の一つとなったといってよかろう。本節で課題としてきたオルガの訴えようのない悲しみには、このような白系ロシア人のありようが凝縮させられているのである。ただいうまでもなく、その造型は日本人の想念が産出したものであることを忘れてはなるまい。

五　印度人アムリの表象—倒錯した人種優劣論—

『上海』における印度人表象は、一方で、英米共同租界の工部局の巡察(警察にほぼ等しい)や日本の紡績工場の警備

を担当する武装守備の要員として描かれるが、その一方で、国際商品のひとつ、紡績製品の販路をめぐって、大陸進出で日本資本と競争する英国の植民地型後衛産業基地を担う人物としても描かれている。

この後者の表象は、高重の紡績工場に勤める参木のもとに貿易情報として伝えられる箇所に認められる。

> 参木は取引部へ到着した今日のランカシアーからの電文を思ひ出した。ランカシアーでは、英国棉の振興策を講じるため、工業家の大会が開催された。その結果、マンチェスターの工業家の集団は、ランカシア一と共同して、印度への外国棉布の輸入に対し、関税の引き上げを政府へ向つて要求した。／参木は此の英国に於けるマーカンチリズムの活動が、何を意味するかを知つてゐる。それは、明らかに、日本紡績への圧迫にちがひないのだ。彼らは、支那への日本資本の発展が、着々として印度に於ける英国品―ランカシアーの製品のその唯一の市場を襲つてゐることに、恐慌を来してゐる。しかし、支那では、日本の紡績内に、此の支那の工人達のマルキシズムの波が立ち上つてゐるのである。母国の資本は今は挟み撃ちに違ひ出したのだ。参木には、ひとり喜ぶ米国人の顔が浮んで来た。（「掃溜の疑問」一二）

このように、日本人の眼にアンビヴァレンツな存在として映る、印度人の上海居留形態を作品の背景に据えながら、租界都市上海にうごめく印度人の表象をたどろうとするとき、その焦点となる人物がアムリであろう。

初出の雑誌掲載テキストの「足と正義」第六節には、共同租界における印度人とその支配者大英帝国の官憲の衝突―印度人遮断という事件が、租界における民族間の鋭い緊張関係を暗示するものとして描かれていることがまず注意される。釈尊降誕祭の日（四月八日）、印度の独立の志士アムリから、上海租界の英米居留地で英国官憲と印度人の間で衝突が勃発するから見に来るように、と呼ばれたアジア主義者の山口は、参木と一緒に中国の管轄区域に隣接する街角で起こっている印度人遮断事件を見物する。寺院へ向かおうとする印度人の群衆が、英国駐留兵と印度人の警官、さらには中国兵らによって遮断されたために衝突が起ったのである。

この衝突事件の衝撃は、印度人が官憲と群衆に分かれて争う現実から、かれらが一方では、支配される惨めな植民地の被抑圧の群衆であるとともに、他方では、英国の手先としての抑圧者であるというアンビヴァレンツな存在であることを見せつけたところにあろう。衝突の前面に出ることはなく、背後にいて印度人の警官を操っている「英国官憲」の狡猾さ、そしてそのために、アジア人同志が流血の衝突を起している「アジアの愚かしさ」と「アジアの無力」を山口と参木二人

に見せつけるのがアムリの誘いの意図であろうとアジア主義者山口は推測する。そこで山口は、以前に行なわれた「アジア主義者の会合」を思い出して、いま眼前に繰り広げられた衝突事件から、被抑圧者であると同時に抑圧者でもあるアジア人の矛盾する存在形態をアジア人に覚醒させるためには、まさに自分の唱える「日本軍国主義」によって西欧列強のアジア進出を阻止する必要があると考えた。

ここで注意すべきなのは、この事件の起った地域が「中国の軍隊の遮断してゐる道路」であり、「中国の管轄区域」だということである。そのことによって、山口はアムリの意図が「日本人に考へろ」というところにあったことに気づく。それまでかれは「中国兵と対峙してゐる印度人の集団を、印度人の警官が圧迫してゐる」というようにとらようとしていた。しかし、それはまもなく「此の印度人の醜態を見るが良い」のほかに、「中国の国内で暴れてゐる外国兵を、支持してゐる中国の兵士のその顔を見よ」という意図がアムリにあったことに気づいたのであった。

> 事実、山口はアムリに逢ふと、アムリの誇る「印度人の数の多数」を、いつも此の言葉で粉砕するのが癖であつた。（中略）日本の軍国主義こそ、東洋を救ひ上げてゐる唯一の武器ではないか。その他に何がある。中国を見よ、印度を見よ、シャムを見よ、ペルシャを見よ。日本の軍国主義を認めると云ふことは、これは東洋の公理である。（「足と正義」六）

アジア人の無力の根源に「武器」の欠乏を主張する山口がアムリに誇るのは日本の軍国主義であった。武力こそアジアが西欧列強と対抗し得る力であった。だから、「中国も印度も日本の軍国主義を認めてこそ、アジヤの聯結が可能になる」と山口は主張する。その山口の発言からは、アジアの連合を武力によって達成し、その連合によって西欧列強に対抗しようとする思想が、単純にしかも野蛮なかたちでみとめられる。日本以外のアジアの人々にとって恐ろしいのは、それこそがのちの日本軍部の主張とつながっている点であろう。

この山口のアジア主義思想の根底にひそむものは、アジア人を劣等視することによって、日本こそが唯一アジアの指導者に君臨し得るという人種優越観であろう。山口がそれを「武力」の優劣で覆っているところには、後の日本軍部の発想の原型が透かし見られる。この発想の倒錯は、前節で述べた白系ロシア人の表象でもすでに見られていたものであった。そこではいうまでもなく、「国家」に価値観が求められることで、白色人種と黄色人種の優劣論が倒錯されていた。した

がって、『上海』における印度人の表象は、ある意味では、前節の白系ロシア人への蔑視と表裏一体の関係をなしている。

この印度人遮断事件からみる印度人の表象（中国人の表象をも含めて）は、ロシア人への蔑視から生まれた優越感によっていかに増幅されているかが、山口の眼に映る印度人の群衆のイメージをみてもわかる。

（山口は）眼前の支那と印度の無力な友の顔を見てゐると、笑ふことは出来なかつた。彼は街路で、此の民族の衝突し合つてゐる事件とは無関心に、笊に盛り上つてゐる茹卵を見つけると、支那人の顔を思ひ出した。足元の屋台の上に、斬られた鳥の首ばかりが黒々と積つてゐるのを見ると、印度人を思ひ出した。（「足と正義」六）

この隠喩が意味する山口の心象は、印度人であれ中国人であれ、すべては無気力で無関心なままに西欧列強の下にひれ伏すアジア人の存在形態である。その契機としては、黙ったままで殺されていくアジア人に山口がおぼえた嫌悪感がこの隠喩を発想させたといってよかろう。その隠喩というのは、動物の死肢が無造作に積み上げられたイメージと結びつけられて連想されている。日本人の視線からは、印度人もまた物体化される存在であった。それゆえに、かれの眼からみれば、この衝突事件の渦中の印度人は、「数の多いと云ふことは、ただ弾丸除けになるだけだ」としか言いようがない。印度人アムリの人物造型は、『上海』における一つのテーマである東洋と西欧の対決のもとに取りあげられているのであり、そのためにも、中国と同じくアジアの大国である印度を取り上げて、中国の登場人物と対照的に描くことは作者の意図でもあった。

小説の展開からみると、最初、印度人の表象は共同租界の点景（小説の冒頭に「印度人巡査の鳥巣のような鬚」にすぎなかった。しかし、やがて日系紡績工場のストライキが勃発すると、日本人の協力者（「高重と印度人巡察の発砲」）として登場し、ストライキとかかわって中国職工に対抗する敵対者であるように仕立てられている（「印度人の巡査は、背後からその壮漢に飛びつくと、ターバンを摺らして横に倒れた」）。ただその一方で、英国植民地としての綿糸紡績の拠点となった印度が日本の紡績工業の競争者となると、今度日本人の眼からは、印度人が憎悪すべき対象に転化する。そのためであろうか、小説の決定版においては、さらに一章が加えられ、山口とアムリの交渉場面が描かれる。そこでは、山口の唱えるアジア主義が当時の日本に飛び交う東洋と西欧の対立や、白色人種対黄色人種の民族優劣論争とからませて論じられ

て、おそらく初出テキスト完成後の作家が、読者に訴えようとしている当時の認識をより明確に説示する必要を感じたのであろう。しかし、その歪んだ方向性が、日本軍国主義の正当化へと倒錯してゆく日本人の思考形式は作家のあずかり知らぬことであったろうか。

決定版の加筆において、アムリは日本留学の経験を持ったものとされ、山口と日本語でしゃべるように再設定されている。租界といった外国人の言説空間においては、外国語の問題は捨象されている。こうした人物設定の背後には、何もかも日本人の言説空間によって包摂させようとする意図が透かし見られる。この包摂を実現するために、たんに外国人の言説空間ばかりではなく、外国人の登場人物の造型にも日本人の政治目的や文化・生活習慣に包摂すべく、さまざまな歪曲、変形が見られることは、その延長上の思考形式である。

ただ本稿には作家横光利一のなかに一九二〇年代の典型的な日本人としての思考形式をとらえようとするだけではない。作家の視点には、日本人登場人物の視線を超えた、よりグローバルな思考を模索していることをも見逃してはならないであろう。作家(話主というべきかもしれない)は、次の場面では山口よりも、むしろアムリの側に視点を置いている。その意図がなにかということである。

小説の後半で甲谷は、中国人の暴動が活発化している危険区域から逃れて山口の家にたどり着く。そこで腹一杯食べたあと、山口に従ってその地下室に設けられた人骨工場を見に行く場面がある。「蠟燭の光りの中で笑つている山口が、甲谷には恐るべき蛮族のやうに見えて来た」。そこで山口は、宝石商で、印度の国民会議派の一人であるパンヂツト・アムリのことを甲谷に紹介して、このアムリが「君のするべきことをだんだん君に教えていくだらう」と言う。目的を実現するためには手段を選ばない「恐るべき蛮族のやう」な山口よりも、アムリのアジア主義こそ日本人を「教え」導く方向性のあることを作家はここでほのめかしている。アムリの表象に作家がこめた意図とはおそらく、アジアの未来を必死に考えるアジアの外国人の姿であったのだろう。

六　むすび

『上海』において、「参木には此の厖大な東亜の渦巻が、厖大な姿には見えなかつた。それは彼には、頭の中に畳み込

まれた地図に等しい」（「持病と弾丸」二）とある。この比喩的描写は日本人の登場人物参木の心象の喩となると同時に、また作家自身の感受性をもうかがわせるものであろう。これまで見てきたように、『上海』における外国人表象は、一九二〇年代の租界都市上海の政治・経済・文化そのものの縮図（地図）として理解することはきわめて難しい。それというのも、この「各国人」によって作られた「厖大な東亜の渦巻」がむしろ、日本人との関係性によってしか表象できなかったからである。作者横光利一がこの外国人表象の問題にいかにこだわっていたかは、『上海』という小説の改稿をみてもわかる。初掲載のテキスト（「或る長編」の五編）と、初刊本・決定版の『上海』との間には大幅に改稿がおこなわれているが、その箇所がすべて外国人表象にかかわる叙述に限られている。

したがって、この小説における外国人表象を取りあげて考察してきた本稿は、ある意味で、この作品の本質に迫る試みであったともいってよかろう。ただそのすべてを尽くすことは紙幅の関係上とてもできなかった。本稿ではひとまず四人の登場人物（中国資本家銭石山・中国の紡績職工芳秋蘭・白系ロシア人オルガ・印度人アムリ）をめぐって考察したが、欧米人の表象、たとえば、ダンサー宮子を嫁に求める甲谷が自らの「足」の短さを歎く箇所にみられる西洋人へのコンプレックスには、西洋人表象の一様相がみとめられよう―に関する考察をふまえねば、一つの視座であるポスト・コロニアリズム論としても、一九二〇年代の日本人の世界認識（国際認識）の全体像を相対化することは不可能であることはいうまでもあるまいが、ただし、このような西洋人の表象は、外国人の表象として、これまでにとりあげた中国人、印度人、白系ロシア人などとは、かなり異質なもので、別箇の問題として論議する必要があるから、別稿に譲らせていただきたい。

(1) 五・三〇運動に関しては拙稿「横光利一『上海』における五・三〇運動の描写をめぐって―同時代関係資料との比較をとおして―」を参照下さい（『文学研究論集』第一三号、筑波大学比較・理論文学会、一九九六年）。なお都市表象に関する論考「虚構としての租界都市の意味―横光利一『上海』における都市表象―」（仮題）を用意しているが、未発表である。本稿はそれに続く論考となっている。

(2) 徐公粛・丘瑾璋『上海公共租界制度』所収「一九三〇年十月二十二日上海公共租界外僑戸口統計表」「一九三〇年十月上海人口統計表」、中国科学公司一九三三年版、上海書店復刻版『民国叢書』第四編第二四種。

(3) 小森陽一「文学・身体・象徴・交換―流動体としてのテクスト『上海』―」（『昭和文学研究』一八号、昭和五九年一月。

(4) 「持病と弾丸」には、お柳が「あの人（銭石山）がかう云ふ所が見たくつて、それであたしにこんなことをさせてるの」と甲谷に告げる。

そこで、銭石山と初めて会った甲谷は「どうも、奥さまは僕を馬鹿になさる癖が有りですので、つひ敷居が高くなつて了ひます」と言っている。後に、銭石山とお柳が阿片を吸うとき、甲谷が「ふと、彼ら二人が自分の視線を楽しむために、此の楼上に呼び出したにちがひないと判断した。すると、俄に腹が立ち始めた。（中略）彼は今迄真面目に饒舌つてゐた自分の顔に、急に哀れを感じ出した」とだけ描かれている。

(5) 赤坂憲雄『異人論序説』には「〈異人〉とは実体概念ではなく、すぐれて関係概念である。〈異人〉表象＝産出の場にあらわれるものは、実体としての〈異人〉ではなく関係としての〈異人〉、さらにいって〈異人〉としての関係である。」という。筑摩学芸文庫、一九九二年、頁三。

(6) 初版『上海』第一節。

(7) 宇高寧『支那労働問題』、国際文化研究会、大正一四年八月、頁六八五。

(8) 前田愛「SHANGHAI 1925」、『都市空間のなかの文学』所収、筑摩書房、一九八二年十二月、頁三九一。

(9) 『貢太郎見聞録』（田中貢太郎著）、盛文館書店、大正十五年十二月、頁三七六。

(10) ポット『上海史』（土方定一・橋本八男訳）生活社昭和十五年十一月、頁四二八。